



Title	日本語のサセル文における非使役的解釈について
Author(s)	山川, 太
Citation	日本語・日本文化. 2023, 50, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91265
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語のサセル文における非使役的解釈について¹⁾

山川 太

1. はじめに

日本語のサセル文が使役以外の非使役的解釈を持つことは従来から指摘されている（柴谷(1978)、Ritter and Rosen(1993)、高見(2006)等²⁾）。

- (1) a. 田中さんは子供を交通事故で死なせた。
b. 田中さんは帰宅途中に足をすべらせた。
c. 田中さんはうっかりして魚の切身を腐らせた。
- (2) a. 先生は太郎を廊下に立たせた。
b. 田中さんは娘に歌を歌わせた。
c. 田中さんは息子に夕飯を作らせた。

(2) のサセル文が典型的な使役の意味を表すのに対し、(1) に見られるサセル文では、使役というより迷惑や被害といった非使役的な解釈が出てくる。(1) のそれぞれの文では、いわゆる使役形態素 “-(s)ase” が用いられてはいるものの、主語名詞句が補文の表す事象を自ら意図的に引き起こしたものではなく、その事象が起こったことに対して、何もできなかったことで、そのような事象を許容してしまった（防げなかった）という意味合いを持つ文であり、結果として、主語名詞句が本文の表す事象により迷惑や被害を被っていると解釈される（高見(2006)）。このような非使役的な意味を Ritter and Rosen(1993) は一括りに “EXPERIENCE（経験）” と呼び、いわゆる使役の意味を有するサセル文にはその補文の動詞として他動詞と非能格動詞のみが現れ、非対格動詞は現れないとしている。確かに、(1) のような非使役的解釈（Ritter and Rosen の言葉では「経験」）を持つサセル文には、「死ぬ」「すべる」「腐る」といった非対格動詞と分類され

る動詞が現れている³⁾。

本稿では、(1)のような非使役的解釈をもつサセル文について考察を行う。本稿での内容は、大まかに以下になる。

- I サセル文において見られる非使役的な解釈（迷惑・被害等）は、サセル文に限られたものではなく、一般的な他動詞文や自動詞文でも生じる解釈であることを指摘する。
- II サセル文が使役的解釈、非使役的解釈のどちらになるのかについては、「制御性（意図性）」“CONTROL”の観点から説明できることを示す。
- III 非使役的解釈のサセル文において、補文中の動詞のタイプに制限は見られないことを、つまり、どのようなサセル文も非使役的解釈を持ちうるということをもI・IIから導く。

2. サセル文における非使役的解釈

サセル文が非使役的解釈を持つのと同じく、受動文（ラレル文）が受動の意味と非受動の意味を有することがある。畠山・本田・田中（2018）は、日本語の受動文には通常受動の意味を持つものと使役の意味をもつものがあるとし、統語構造にも違いが見られるとした⁴⁾。

(3) a. ジョンは不運にもトラックに追突された。

b. ジョンはわざとトラックに追突された。

（畠山他(2018:193,195)）

(3a)は、「不運にも」という副詞の存在によって、主語の「ジョン」が被動作主となり、受動の解釈となる。一方で、(3b)では、動作主指向副詞「わざと」により「ジョン」が動作主になると「ジョンが自ら意図的にトラックにぶつかった」という使役の解釈になる。

また、畠山他(2018)は、使役文（サセル文）にも同様に使役と受動という二種類の解釈が見られることを指摘している。

(4) a. ジョンはわざと彼女を泣かせた。 《使役の意味》

b. ジョンは不運にも彼女を泣かせた。 《受動の意味》

（畠山他(2018:201)）

(4a)のように動作主指向副詞「わざと」が使われると主語「ジョン」が動作主となり、ゆえに使役の意味として解釈され、(4b)のように「不運にも」が使われると「ジョン」は動作主ではなく被動作主という読みが強くなり、「(不運にも)彼女に泣かれた」という受動の意味で解釈される(畠山他(2018:201, 202))。「(4b)の主語「ジョン」が「不運にも」によって動作主でなくなる(＝被動作主になる)→「させ」のもつ《使役》と《受動》の選択肢のうち《受動》が選ばれる」→「(4b)が受動の意味を表す使役文として解釈される」というのが畠山他(2018)の主張である。このような受動の意味は、主語「ジョン」にとっての迷惑や被害といった解釈につながっていくことから、本稿で考察するサセル文における非使役的解釈と同じものであると言える。

畠山他(2018)では、使役形態素「させ」が《使役》と《受動》の意味を有しており、主語の動作主性に応じて双方の意味が交替すると考えられ、結果、以下の(5)のような、「られ」＝受動、「させ」＝使役という一対一の分業ではなく、(6)で示されるように「られ」と「させ」は相互乗り入れが可能なのではないか、という議論に至っている。

(5)

受動	使役
られ	させ

(畠山他(2018:202))

(6)

受動	使役	
られ	→	主語が [+動作主] のとき《使役》になる
←	させ	主語が [-動作主] のとき《受動》になる

(畠山他(2018:202))

本稿では、畠山他(2018)のように「させ」に二つの意味(「使役」と「非使役」(「受動」))が“同居する”とは考えない。そもそも、畠山らの言うような、「不運にも」付加によって、本来、主語名詞句にあるはずの動作主性がなくなり、受動の意味を帯びるようになるという現象は、なにもサセル文に限られたことではなく、通常他動詞文や自動詞文でも観察される。

(7) a. 太郎は不運にも賞味期限の切れたお菓子を食べた。

b. 太郎は不運にも厳しいと噂の田中教授の授業をとった。

c. 太郎は不運にもその日いつもと違う靴で走った。

これらの文の動詞「食べる」「とる（履修する）」「走る」の語彙的な意味構造は、通常、〈動作主〉を持つと考えられるが、(7)のそれぞれの文における主語名詞では〈動作主〉の読みは希薄で、文全体としては「迷惑」「被害」あるいは「後悔」のような解釈が生じている。

(7a)～(7c)における「太郎」から動作主性が除かれていることは、いわゆる「～そうする」置換で確認することができる。

(8) a. 太郎は不運にも賞味期限の切れたお菓子を食べた。

b. * 次郎もそうした。

(9) a. 太郎は不運にも厳しいと噂の田中教授の授業をとった。

b. * 次郎もそうした。

(10) a. 太郎は不運にもその日いつもと違う靴で走った。

b. * 次郎もそうした。

(8b)(9b)(10b)を見て分かるように、(8a)(9a)(10a)の述語を「そうする」で置換することはできない。通常、「そうする」は意図的行為を表す述語の代用形として用いられるが、「そうする」置換ができないということは、(8a)(9a)(10a)それぞれにおける動詞（述語）が意図的行為ではないということを意味する。しかし、一方で、それぞれから副詞「不運にも」を削除した上で、「そうする」置換の結果を見てみると、全てにおいて置換が可能となる。

(11) a. 太郎は~~不運にも~~賞味期限の切れたお菓子を食べた。

b. 次郎もそうした。

(12) a. 太郎は~~不運にも~~厳しいと噂の田中教授の授業をとった。

b. 次郎もそうした。

(13) a. 太郎は~~不運にも~~その日いつもと違う靴で走った。

b. 次郎もそうした。

(11)～(13)では「そうする」置換が許されることから、(11a)(12a)(13a)における述語は意図的行為であるということになる。

(8a)(9a)(10a)と(11a)(12a)(13a)の違いは、副詞「不運にも」の有無であるので、述語の意味の違い（意図的か非意図的となるか）は、この副詞の有無に起因して

いると考えられる。このような議論は、サセル文における非使役的解釈に関しても可能である。

(14) a. 田中さんは子供を交通事故で死なせた。

(* 山田さんもそうした。)

b. 田中さんは帰宅途中に足をすべらせた。

(* 山田さんもそうした。)

c. 田中さんはうっかりして魚の切身を腐らせた。

(* 山田さんもそうした。)

(15) a. 犯人は被害者の首を絞めて死なせた。

(今回の事件の犯人もそうした。)

b. 田中さんは上手に足をすべらせて、スケートを楽しんでいた。

(山田さんもそうして、スケートを楽しんだ。)

c. 豆腐はもともと大豆を腐らせて作っていたという説がある。

(昔の人はそうして納豆も作り始めたのだろう。)

(14) は、いずれも主語に意図性のない、非使役的解釈のサセル文であるが、もちろん「そうする」置換は不可となる。かたや、(15) は同じ「死なせる」「すべらせる」「腐らせる」というサセル文の形をとっているものの、使役的解釈となり、「そうする」置換も問題なく許される。

このように、サセル文の場合も、(11)～(13) の通常他動詞文や自動詞文と同様に、副詞の存在や文脈の存在によって主語名詞句の意図性がなくなり、迷惑や被害、後悔といった非使役的解釈が生じてくることになる。無標の状況下で、主語名詞句の意図性が失われなければ、そのまま使役的解釈になる。

上で、「させ」に二つの意味(「使役」と「受動」)が同居するとは考えないと述べたが、もし、畠山他(2018)のように、サセル文に二つの解釈があるからといって、「させ」そのものに二つの意味が併存していると考えのならば、同様に二つの解釈が生じる「太郎は賞味期限の切れたお菓子を食べた」のような文においても、動詞「食べる」に二つの意味が併存しているとせねばならない。このような考え方は、非常に不経済であるし、明らかに直観に反すると思われる。

本稿では、「させ」の無標の意味は使役的意味であり、有標の状況下では非使

役的解釈がなされる、と考える。では、単一の形態素「させ」が無標／有標の状況に応じて解釈を変えるということは、語彙意味論的にはどのように説明されるのか。これについて、以下で論じる。

3. 日本語述語における「制御性（意図性）」

三宅(2017)は、日本語動詞の意味構造の表示に関し、かつて影山(1993)で設定されていた「制御性（意図性）」の意味要素 CONTROL について再考し、その重要性和有用性について説得的に論じている。

三宅(2017)は、動詞の全てのタイプに「制御性（意図性）」(CONTROL)を持つ型と持たない型があり、CONTROL を持たないものが「非対格」型になる、としている。

(16) a. [EVENT CONTROL X [STATE X BE_{EXIST}]] … “いる”

b. [STATE X BE_{EXIST}]] … “ある”

(三宅(2017:126))

同じ「存在」を表す動詞タイプには、“いる”と“ある”の区別があるが、これは CONTROL の有無によって(16)のように表示される⁵⁾。また、「状態変化」の動詞タイプでは、CONTROL の有無により、(17)のように表示し分けられる。

(17) a. [EVENT CONTROL X [BECOME [STATE X BE_{PRED}]]] … “なる/やせる/等”

b. [BECOME [STATE X BE_{PRED}]]] … “なる/壊れる/等”(多数)

(三宅(2007:127))

さらに、同じ「出る」「入る」という動詞の場合にも、(18a)では CONTROL があり、(18b)の場合は CONTROL を持たないとされる。

(18) a. 太郎が部屋から出た／太郎が部屋に入った

b. 煙が煙突から出た／ボールがゴールに入った

(三宅(2007:127))

「やせる」についても、(19a)の場合には CONTROL を持つ(17a)のような、(19b)では CONTROL がない(17b)のような意味構造を持つと考えられる。

(19) a. 太郎は頑張ってダイエットをしてやせた

b. 太郎は病気でげっそりとやせた。

4. 使役形態素 -(s)ase における「制御性（意図性）」

3. で見たように、三宅 (2017) では、基本的に動詞の全てのタイプに CONTROL を持つパターンと持たないパターンがあるとされる。本稿では、この三宅の論をサセル文における非使役的解釈の分析に採り入れる。

三宅の言うように、「動詞の全てのタイプに CONTROL を持つパターンと持たないパターンがある」ならば、使役を表す、動詞的な接辞である -(s)ase にもこのような 2 つのパターンがあることになる。本稿では、CONTROL の有無が -(s)ase の制御性（意図性）を決めることになり、結果、サセル文にける非使役的解釈につながっていくと主張する。

(20) a. 先生は太郎を廊下に立たせた。

b. 田中さんは娘に歌を歌わせた。

c. 田中さんは息子に夕飯を作らせた。

(21) a. 田中さんは子供を交通事故で死なせた。

b. 犯人は被害者の首を絞めて死なせた

(22) a. 田中さんは帰宅途中に足をすべらせた。

b. 田中さんは上手に足をすべらせて、スケートを楽しんでいた。

(23) a. 田中さんはうっかりして魚の切身を腐らせた。

b. 豆腐はもともと大豆を腐らせて作っていたという説がある。

(20) のサセル文は全て典型的な使役の解釈となるが、(21) ~ (23) はそれぞれ a. が非使役的解釈、b. が使役的解釈とされる。既に観察したように、a. の述語には意図性が欠如し、ゆえに「そうする」置換は不可能とされた。本稿では、b. のようなサセル文には存在している CONTROL が a. には存在しないために、解釈の違いが生じることになると分析される。

-(s)ase は使役形態素であるので、その意味には「使役」の CAUSE が含まれることになり、(20) の典型的な使役の意を表すサセル文は (24) のような表示を持つ。もちろん、(21) ~ (23) の b. も同様の意味表示を持つと考えられる。

(24) [CONTROL X [CAUSE X [EVENT]]]

一方、非使役的解釈を持つ (21a)(22a)(23a) のサセル文では、制御性（意図性）が

ないわけであるから、-(s)ase は CONTROL を含まず、(25) のような表示を持つことになる。

(25) [CAUSE X [EVENT]]

しかし、例えば (21a) のような場合、(25) の X に入るのは「原因」である「交通事故（で）」になるはずであるから、主語である「田中さん」の入るべき位置がないことになってしまう。やはり、非使役的解釈の場合も、CONTROL がないとはいえ、主語の位置する場所がなければならない。本稿では非使役的解釈の持つ非制御性（非意図性）は CONTROL の欠如に起因すると分析されるので、そのことと主語の位置の確保ということには一種のジレンマが生じることになる。

ここで、非使役的解釈における受動的な意味（「迷惑」「被害」「後悔」等）が一体、どこから生じているものなのか、について改めて考えてみたい。

(26) a. 太郎は戦時中、妻を死なせてしまった。

b. 暗い階段でつい足を滑らせてしまった。

c. 花子は不注意から子供に風邪を引かせてしまった。

安藤(1996) は、本稿で扱っているような非使役的解釈を持つ (26) のような文について、以下のように述べている。

(27) 「これらから感じられるのは「迷惑」というよりも、「主語の責任」「遺憾な気持ち」でなかろうか。そうだとすれば、そういう含意はどこから生じるのか。それは、いわば使役主が自らを「無意識の加害者」として自覚するところから出てくる含意だと思われる。そのつもりはなかったのだが、結局、不本意な結果を生じさせてしまった、という自責の気持ちである。」（安藤(1996:41)）

さらに、安藤は以下のように続ける。

(28) 「使役主が自らを“無意識の加害者”として自覚するというのは、本来、加害の意志はもっていなかった、ということである。「ソウスル」のような客観的な意志表現で代用できないのは、そのためである、と考えられる。」（安藤(1996:41)）

本稿では、以上のような安藤の洞察をサセル文の分析に取り入れることによって、上述のジレンマを解消する。非使役的解釈の受動的意味（「迷惑」「被害」

「後悔」等)の出どころを、安藤の言う「使役主が自らを“無意識の加害者”として自覚する」というところから来るものであるとすると、例えば、(26a)の場合、「太郎」は「妻の死」の発生について、実際には CONTROL (制御/意図) してはいないものの、サセル文の主語に据えられることにより、あたかも CONTROL (制御/意図) できるかのように扱われている。「太郎」は、いわば“格好だけの”、“見せかけの”使役主であると言え、その結果、起こってしまった「妻の死」を、あたかも「太郎」が CONTROL (制御/意図) したかのような含意が生まれる(安藤(1996)の言う「自責の気持ち」も、この含意から派生してくるものであろう)。そして、そこから非使役的解釈(ここでは「責任」や「後悔」の意がふさわしく思われる)が派生してくると考えられる。このように考えると、非使役的解釈の場合、CONTROL が欠如しているのではなく、CONTROL は確かに存在してはいるものの、本来の完全な意味要素としては機能せず、“弱い” CONTROL として存在していることになる。(20)のような典型的な使役の意を表すサセル文の場合では、CONTROL は完全な、“強い”意味要素である。

ここで“弱い” CONTROL を仮定せず、EXPERIENCE という独自の意味要素を立てることも可能であるが、そうすると(8a)のようなサセル文以外の文における受動的解釈の場合にも EXPERIENCE が必要となる⁶⁾。しかしながら、サセル文での非使役的解釈や(8a)の文が有する受動的解釈は派生的な意味であるので、その表示のために特別に新たな意味要素を設ける必要性はない⁷⁾。本稿では“弱い” CONTROL が、結果として EXPERIENCE の解釈を受けていると捉えておく⁸⁾。

CONTROL のない動詞は「非対格」型となるが、三宅(2017)も述べるように、非対格動詞は間接受動文になりにくいとされる。

(29) a. 田中さんは息子さんを事故で死なせた。

b. # 私は田中さんに息子さんを事故で死なせられた(死なされた)。

(29a)のような、非使役的解釈のサセル文を間接受動文で使うと、元の非使役的解釈(「田中さん」にとっての「迷惑」「被害」「後悔」等)が消えてしまうことから、元の解釈を保持したままで間接受動文にすることは困難であると言える⁹⁾。

これは、非使役的解釈を持つサセル文が完全な、強い CONTROL を持たず、弱い CONTROL を持つタイプであるので、CONTROL のない非対格動詞と同じような特性を示すためだと考えられる。

5. 補文中の動詞に制限はあるのか

非使役的解釈のサセル文において、補文中の動詞にどのようなものが用いられるかについては、例えば、Ritter and Rosen(1993) は、サセル文で非能格動詞と他動詞が用いられると使役、非使役（彼らの言葉では「経験」）の両方の意味を表すことができ、また、非対格動詞が使われると非使役の意味にしかない、としている¹⁰⁾。

高見(2006) では、サセル文が使役的解釈か非使役的解釈のどちらになるかは、動詞の種類に依存するのではなく、主語となる人間の意図性に依存するとしている。高見(2006) でも「意図性」という言葉が使われているが、これは本稿での CONTROL の概念と同義である。高見の説が正しいとすれば、使役的 or 非使役的という解釈の違いを「制御性（意図性）」（“CONTROL”）の強弱に帰する本稿においても、動詞の種類に制限はないという結論に至る。

なお、外崎(2021) では、以下の(30)のような「責任・後悔」の解釈の場合、補文の動詞は、非対格自動詞でかつ形態的に対応する他動詞がないもの（(30) (31a)）、または非対格他動詞（(31b)）など、ごく少数に限られるとしている。

(30) 太郎は不注意にも目を離した結果、幼い花子を死なせた。

(外崎(2021:163))

- | | |
|--------------------------|----------|
| (31) a. 太郎はうっかり息子を転ばせた。 | 《非対格自動詞》 |
| b. 太郎はうっかり息子に怪我を負わせた。 | 《非対格他動詞》 |
| c. * 太郎はうっかり息子に発禁本を読ませた。 | 《他動詞》 |
| d. * 太郎はうっかり息子を運転席に座らせた。 | 《非能格自動詞》 |

(外崎(2021:164))

しかしながら、(32) のように言えることから、他動詞や非能格動詞も制限なく補文中の動詞になりうると言える。

- (32) a. 太郎はうっかり息子に腐った卵を食べさせた。 《他動詞》

b. 太郎はうっかり息子を遊泳禁止エリアで泳がせた。《非能格動詞》

6. おわりに

本稿で主張したことを以下にまとめる。

- I サセル文において見られる非使役的な解釈（迷惑・被害等）は、サセル文に限られたものではなく、一般的な他動詞文や自動詞文でも生じうる解釈である。
- II サセル文が使役的解釈、非使役的解釈のどちらになるのかについては、「制御性（意図性）」を表示する“CONTROL”が完全で、“強い”場合には使役的解釈となり、“弱い”場合には非使役的解釈となる。
- III 非使役的解釈のサセル文において、補文中の動詞のタイプに制限はなく、どのようなサセル文も非使役的解釈を持ちうる。

註

- 1) 「サセル文」とは、いわゆる「使役文」のことであるが、本稿は使役文の非使役的解釈について考察するものであるので、使役文ではなくサセル文という呼称を採る。
- 2) 柴谷(1978:316)では、このような解釈を「消極的な許容」と呼んでいる。
- 3) 自動詞には「非対格動詞」、「非能格動詞」の区別があり、大まかには、意図的に動作を行う〈動作主〉を主語に取る自動詞が非能格（「遊ぶ」「走る」「話す」等）であり、人間の意志的作用が関わらない、自然発生的ないし自発的な出来事を表す自動詞が非対格（「燃える」「折れる」等）であると言える（影山(1993)、影山・由本(1997)等）。
- 4) 畠山他(2018)では、受動を表す(3a)は、以下のi)の構造を、使役を表す(3b)はii)のような構造を持つとされている。
 - i) [s ジョン_i は不運にも [s トラックに_{ti} 追突さ]れた]
 - ii) [s ジョン_i はわざと [s トラックに pro_i 追突さ]れた]
- 5) 三宅(2017)では、「状態」(“STATE”)を表示する“BE”は、項の「存在」を表す existential なもの（「存在」）と項の「属性」を表す predicative なもの（「叙述」）の2種類に分けられ、前者が BE_{EXIST}、後者が BE_{PRED} と表示される。
- 6) 本論中、2. で述べたように、本稿では、「させ」や通常他動詞等に「使役」「非使役（受動）」の二つの意味が併存するとは考えないので、このことから EXPERIENCE の存在は認められない。

- 7) (8a) が有する受動的解釈は、「不運にも」「賞味期限の切れたお菓子」から醸成される解釈であり、この意味で「派生的」と呼ぶ。(11a) の場合は、主語「太郎」が意図性を有する、「本来的」な解釈となる。
- 8) いわゆる「経験者 (Experiencer)」の意味役割を本来的に有する「風邪をひく」が表すような「経験」の意味と、サセル文での非使役的解釈が持つ「経験」の意味は、厳密には異なったものであると考えられる。前者が「本来的」で「根源的」な意味だとすれば、後者は「派生的」意味であるということになる。
- 9) (29b) そのものは非文とまでは言えないかもしれないが、(29a) が有していた非使役的解釈（「田中さん」にとっての「迷惑」「被害」「後悔」等）の意味は消失してしまっており、このことを示すために#を付している。
- 10) 高見(2006:506) は以下のような例を挙げ、Ritter and Rosen(1993) の「非対格動詞が使われると非使役(彼らの言葉では「経験」)の意味にしかない」という主張を妥当ではないとしている。
- iii) 私はたらいの水を日なたに出して、蒸発させた。
 - iv) 庭師は、特殊な薬で庭の雑草を枯れさせた。
 - v) 私はガラスクリーナーで鏡を磨いて、光らせた。
 - vi) 妹は、アイスクリームを冷凍庫で凍らせた。
 - vii) 長雨がカビを生えさせる結果となった。
 - viii) 気象庁の連絡の遅れが、津波の被害を広がらせたのです。

参考文献

- 安藤貞雄(1996)『英語学の視点』開拓社
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶(2018)「使役を表す『受動文』」『言語研究』154, 193-204.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子(1997)『日英比較選書7 語形成と概念構造』研究社出版
- 三宅知宏(2017)「日本語動詞における『制御性(意図性)』をめぐって」森山卓郎・三宅知宏(編)『語彙論的統語論の新展開』117-134. くろしお出版
- Ritter, Elizabeth and Sara T. Rosen(1993) “Deriving Causation,” *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519-555.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
- 高見健一(2006)『「一させ」形が表わす『使役』と『経験』の意味』鈴木右文・水野佳三・高見健一(編)『言語科学の真髄を求めて—中島平三教授還暦記念論文集』499-511. ひつじ書房

外崎淑子(2021)「受身文における事象制御性について—使役文と比較して—」岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也(編)『言語研究の楽しさと楽しみ—伊藤たかね先生退職記念論文集』156-166, 開拓社

<キーワード> サセル文、非使役の解釈、経験、制御性(意図性)、CONTROL

On the Non-causative Interpretation of *Saseru*-sentences in Japanese

YAMAKAWA Futoshi

The aim of this paper is to investigate the non-causative interpretation of *saseru*-sentences in Japanese.

Saseru-sentences exhibit two interpretations, that is to say a causative interpretation and a non-causative interpretation. I show that such an interpretational alternation can be observed not only in *saseru*-sentences but also in “ordinary” transitive/intransitive sentences. Furthermore, assuming two types of CONTROL, i.e., a “Weak” CONTROL and a “Strong” CONTROL, I argue that the non-causative interpretation of *saseru*-sentences depends on “Weak” CONTROL.

The analysis presented in this paper leads to the conclusion that every kind of verb can be embedded in *saseru*-sentences.